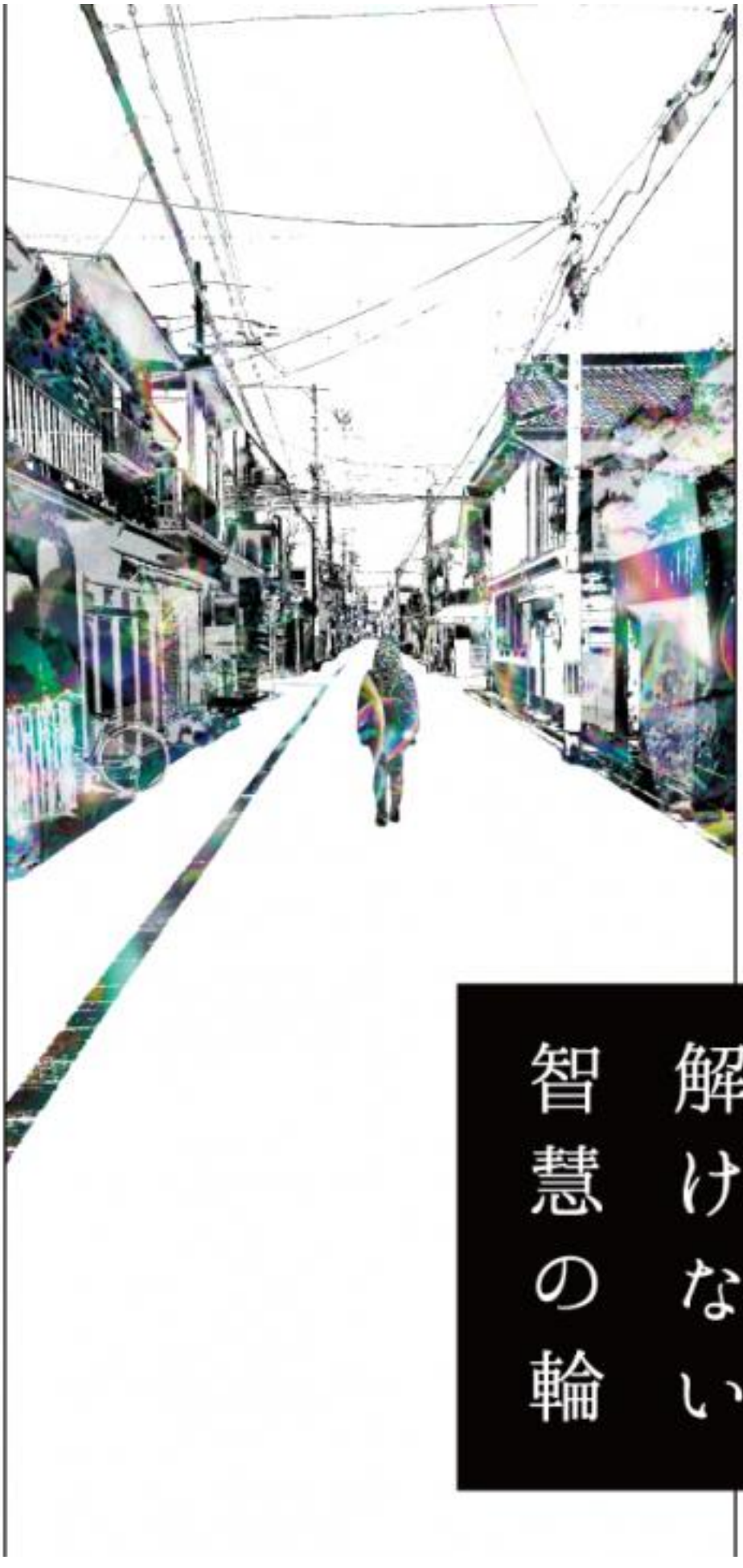


神様にしか解けない智慧の輪

INUI TAKASHI

登場人物

わたし
有実
少女
男

1

黄色い道（回想）

赤い、重たいランドセルをしょっていた。

延々につづいているかのような線路沿いの道。後ろから、前から、踏切の声が聞こえる。

電車が大きな音を立てて追い越していく。ちょうど正面に夕焼けがあって、ゴム跳びをする女の子たちの輪郭が逆光にきらきらして綺麗だった。まぶしくて、うつむいて通りすぎる。

脇に逸れると「黄色い道」と呼ばれている道があって、左から強く陽射しが照りつけて、家並みから伸びた影の中を選んで歩いた。

少し前を、知らない大人の男の人が歩いている。

他には誰もいない。

一歩踏み出す毎に、歩く震動でランドセルがガタガタ鳴った。

目の前の男が立ち止まる。

二人以外、誰もいない道。
男はゆっくりこちらを振り返った。
目が合う。

2

夏の空き地（夕方）

膝の高さまで生長した雑草。
乱暴なくらい蝉の叫びが鳴っている。
まるで水の中にいるように、視界全部を青い夕方が浸している。
わたしは空き地の中央までやって来る。きみどり色の手提げ鞄を提げている。
そちこちに無造作に落ちているコンクリートのブロック。
立ち止まり、静かにスキップの練習を始める。スキップが上手にできないわたしは、かつてこの町で体験した、子供の頃を思い出す。拭おうとしても拭いきれないみじめな気持ち。

＊

空き地の外。

自転車を押してくる人影が立ち止まり、フェンス越しにわたしの姿を見つける。彼女は自転車をそこに止め、前かごの中からビニール袋を持ち上げる。かすかにガラスのぶつかりあう音がする。

＊

気配を感じ、わたしが後ろを振り向くと、大きなビニール袋を提げた同い年くらいの、知らない女の子が立っている。

彼女　「何してんの？」

沈黙。

彼女　「あんた、誰？」

わたし「……」

彼女　「何してんの？」

わたし「……スキップ」

彼女は落ちているコンクリートのブロックをざっと見渡す。

彼女　「このブロック、動かしてないよね？」

わたし「うん」

彼女は美人で、わたしは半分見惚れるようにその場に突っ立っていた。

彼女はしゃがみこみ、ビニール袋の中からガラスのビンを次々と取り出し、コンクリートブロックの上へ並べていく。ひとつひとつのビンの中には、さまざまなものがそれぞれ丁寧に収まっている。

ビン詰めの十円玉。

ビン詰めの枯れ葉。

ビン詰めの土。

ビン詰めのビスケット。

ビン詰めの蝉の抜け殻。

ビン詰めの鉛筆。

「透明」のなかに収まった、「茶色」が並ぶ。

わたし「わぁ、すごいね」

触れようとして手を伸ばすと、

彼女　「さわらないで」

その声はさして怒っているでもなく、ビンをさっとよけた。

わたし「ね、この近所に住んでるの？」

彼女は無視する。

配置にはルールがあるみたいだった。彼女だけが分かるルール。コンクリートブロックの向きをかえたり、ビンのふたを少しゆるめたりしながら、彼女はそれぞれをあるべき位置へ配置していく。

わたし「何してるの？」

彼女　「おまじないだよ」

わたし「おまじない？」

彼女　「うん」

わたし「何のおまじない？」
彼女　「しあわせになれるおまじない」
わたし「あはっ、しあわせになれるおまじない」

わざとちょっと馬鹿にするようなニュアンスを混ぜた。
彼女は真顔で言う。

彼女　「そうだよ」
わたし「どうするの？」
彼女　「いろいろ向きとかあるんだよ。毎日少しずつ違うんだ」
わたし「毎日こんなことしてるの？」
彼女　「うん。日が沈む時間には来るよ。毎日」
わたし「昼間は何してる人？」
彼女　「おまじないの準備してるよ」
わたし「え？」
彼女　「けっこう大変なんだから。ビンを拭いて、材料選んで、量って」
わたし「……材料も日によって違うんだ？」

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

神様にしか解けない智慧の輪（おためしサンプル）

2018年11月6日　初版発行

著　者　　乾隆　　© 2018年
発行者　　石村寛之
発行所　　有限会社レトロインク
〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7
電話　0422-24-9529